

三 あゝ私が映つてゐるのか

鏡と云ふものを知らぬ山奥の者が、偶町へ出て鏡屋の前に通りかゝつた。不圖昨年亡くなつた父親に出逢つたものだから堪らない。ものゝ小半日も立ちつくして、父懐かしの涙に咽んで居る。呼べど答がない叫べど返事がない。店の人に怪しまれ父が居るからとて、買ひとつて喜んで持ち帰り、長持の中に收め、暇さへあれば打眺め、話をしかけて欣々然として居た。妻なる人が之を怪しみ、留守の間にそつと長持の蓋をとれば、こは如何に己に似よつた美婦が潜み居らんとは。驚き且つ怒り、夫に其無情を詰る。夢にも知らぬ男は極力之を否定する。物騒ぎに驅付けた日頃知合の尼さんが、正體を見付けて來ると、鏡に映つた己が姿を姿とも知らず、「御安心なさい。其女は早出家して頭を圓めて居ます」と云つたので、一同は呆氣にとられ、やつと氣を静め、ほつと一息したとの昔譚。

三人が三人共、自分の姿を眺めて居ながら、自分の姿とは氣付かずに、人の姿とばかり思ふて、泣いたりわめいたり怒つたり慰めたりして居る。人生の凡は皆こんなものだ。私共も至る處に映る自分の姿を眺めて居ながら、自分とは思はずに人の姿とばかり思ふて居る。氣を付けねばならぬではあるまいか。

蠅が天井に止まつて吾々人間を見下して居る。吾々は蠅が顛倒になつて居ると思ふけれども、蠅の方では人間は顛倒になつて居ると思ふであらう。焉ぞ知らん。自分が顛倒になつて居るから、他が顛倒に見えるのではなからうか。隣の家の障子の破れを笑ふ人が、何ぞ計らん、自分は我家の障子の破れ穴から覗いて居る。變なものでせう。「あの人はどうも自分を深く信用して呉れない」と不平を云ふ前に、此方が打解けて居ないのでないかと顧る。姑

が愛あいして呉くれぬと愚痴ぐちを零こぼす前に、此方こちらが姑しゅうとめを常つねに疑うたがつて居ゐはせぬかと反はん省せいする。茲こゝが大切たいせつで。信用しんようして呉くれないのも、愛あいして呉くれないのも、此方こちらが信用しんようせず愛あいせぬのが映うつつたのではあるまいか。